

ベルギーでのバーチャル日本人家庭訪問プロジェクト 2 年目の実践報告

—オンラインの接触から学習者と日本人家庭が得たもの—

小熊 利江（ゲント大学／お茶の水女子大学）

要旨

本学では、コロナ禍により日本に留学できなかった学生のために、現地在住の日本人家庭とオンラインで接触する「バーチャル日本人家庭訪問プロジェクト」を考案した。本実践研究では、同プロジェクトを導入して 2 年目の報告を行う。1 年目からの主な変更点は、学生が日本人の生活についてより学べるように、日本人家庭に家庭訪問らしい雰囲気を出すよう書面で依頼したことである。その結果、オンライン訪問中の雑談が増え、学生が家庭訪問らしさを感じたという割合が増えた。学生が本活動から得たこととして、新しい日本語の語彙や表現、日本に関する情報の他、日本人についての理解などが挙げられた。また、学生自身の日本語能力のメタ認知や学習方略の把握も起きていた。一方、日本人家庭にとっては、滞在国を知り理解する機会、ふり返って日本について考える機会になったと述べられていた。日本人家庭には、外国に住む自分自身についてのメタ認知にもつながったようである。

【キーワード】 海外の日本語教育, 体験型の言語学習, ホームビジット, コロナ禍, 言語運用能力

Keywords: Learning Japanese as a Foreign Language, Experiential Learning, Online Home Visit, Virtual Learning Environment in Corona Pandemic, Language Proficiency

1 背景

筆者の勤めるベルギーの大学の日本学専攻では、学生は 3 年次後期に日本に留学

することになっている。しかし、世界中を混乱させたコロナ禍により 2020 年春から多くの学生の日本留学がキャンセルされた。交換留学で日本からやってくるはずの日本人留学生も来ず、大学の所在地に住む日本人はほとんどいない。留学が中止された学生は、生の日本語に接する機会も限られたため、日本語の運用能力が例年より低いまま卒業することになった。本学では 2020 年夏以降に修士課程に進学した学生について、日本語運用能力を高めるために日本人と会話する機会を設ける必要性を感じていた。だが、ベルギーは当時ロックダウン（都市封鎖）中で、移動の自由が制限されていた。

そこで、日本国内や海外で行われた日本人との交流活動に関する先行研究（植田 1995, トムソン木下 1997, トムソン木下・舩見蘇 1999, 鹿浦 2009, 小熊 2015, 他）を参考にしながら、オンラインでも日本人と交流する活動ができないか思案した。そして、現地の日本人家庭をオンラインで疑似訪問して意見交換を行う活動「バーチャル日本人家庭訪問プロジェクト」を考案し、2021 年春に修士課程 1 年生の日本語コースに導入した。

1 年目のプロジェクトが、学生および日本人家庭に非常に高く評価されたことから、翌 2022 年春にも続けて修士 1 年生の日本語コースに導入した。その際、1 年目の実施に対するアンケート調査から得られた内容を分析し、改善を加えた上で 2 年目の活動を実施した。本研究では、「バーチャル日本人家庭訪問プロジェクト」導入 2 年目における活動の様子、さらに学生の学びや日本人家庭側の得たものについても焦点をあてて分析を行う。

2 バーチャル日本人家庭訪問プロジェクトの概要

2.1 プロジェクトの対象

2021 年に実施されたバーチャル日本人家庭訪問プロジェクト 1 回目、および 2022 年に実施されたバーチャル日本人家庭訪問 2 回目の実施対象は、以下の通りである。

対象：日本学を専攻する修士課程 1 年生、「現代日本語」科目履修者

時期：修士1年次の後期

授業回数：90分授業×8回

人数：18人（2021年）、12人（2022年）

日本語レベル：中級（CEFR：B1～B2）

母語：オランダ語

2.2 活動の留意点

本活動を実施するには、訪問先となる日本人家庭に協力を依頼しなければならない。日本人家庭を選ぶ際に留意した点は、2点である。まず1点目は、学生の訪問先を日本の家庭ではなく、ベルギー国内の家庭に依頼したことである。オンラインであれば、どの地域ともつながることができるが、ベルギー国内の家庭を選んだ理由は、次のようなことである。

- ・同国内であれば時差がないのでバーチャル訪問の都合をつけやすい。
- ・学生と日本人側の知識のバランスが均衡している。学生はベルギーのことをよく知っており、反対に日本人は日本のことを熟知しているので、知識の流れが一方通行にならず互いに知識の交流ができる。
- ・国内であれば、日本人家庭と継続的な交流が期待できる。本学から日本人家庭の居住する地域までは公共交通機関で2時間以内であり、コロナ禍が終息した後には実際に会うことが可能である。

また2点目として、訪問先の日本人家庭を選ぶ際に以下のことに留意した。

- ・学生が最近の日本事情を学べるように、日本を離れて長く経っていないこと。
- ・学生が日本人の生活や家庭の雰囲気を知ることができるように、ベルギーに家族で住んでいること。
- ・学生が様々な意見や考えを知ることができるように、ディスカッションに日本人2人以上で参加できること。

2.3 活動の手順

本学で導入された学生と日本人家庭とのオンライン交流活動「バーチャル日本人家庭訪問プロジェクト」の手順は、以下の通りである。

- (1) 各学生ペアが関心のある日本の話題について調べる。
- (2) 話題について調べた内容を授業内に約 5 分で発表する。発表後に模擬討論をする。
- (3) 学生が日本人家庭にメールで連絡を取り、バーチャル訪問の約束をする。
- (4) 学生自身が選んだミーティング・アプリを用いて、日本人家庭をバーチャル訪問し、自分たちの選んだ話題についてディスカッションを行う。
- (5) 日本人とのディスカッションで学んだことをオンライン授業内に約 5 分で発表する。オンライン発表会には日本人家庭を招待し、発表後に質疑応答、討論をする。

上記の手順(1)(3)(4)は授業外の活動であり、各学生ペアがそれぞれのペースで行った。手順(2)の活動は、学生の準備状況を確認する目的で行われた。手順(4)では、学生が自分たちの使いやすいアプリを選ぶことで、オンラインミーティングを容易に進めることができると考えられる。手順(5)の発表会には、ほとんどの日本人家庭が参加した。

3 バーチャル日本人家庭訪問プロジェクト 1 年目

2021 年春に本活動を初めて導入した際に、体験型の言語学習活動をオンラインで行うことは可能か、学生の運用能力の向上や日本事情の学習にどのくらい有効かなど、活動の評価を行うためプロジェクト終了後に学生と日本人家庭にアンケート調査を行った。ここでは、2 年目の活動との比較のために、1 年目の学生へのアンケートの結果と分析の一部を紹介する。

まず、質問(1)「バーチャル日本人家庭訪問は楽しかったですか」、質問(2)「日本や日本語の勉強のために役に立ちましたか」、質問(3)「困ったことがありましたか」に対する学生の回答を、図 1 から図 3 に示す。質問(1)の回答形式として、「とても楽しかった」「少し楽しかった」「あまり楽しくなかった」「全く楽しくなかった」とい

う 4 段階の選択肢を用いた。その結果、全ての学生が本活動について「とても楽しかった」「少し楽しかった」と肯定的に評価したことが明らかになった（図 1）。何が楽しかったかを自由記述で尋ねたところ、日本人と話すこと（67%）、日本の文化を知ること（11%）、日本人の意見を聞くこと（11%）、おもしろい話を聞くこと（6%）などと続いた。学生が「日本人と話す」ことを非常に欲していたことが、この結果に表れていると言える。

次に、質問(2)においても同様に 4 段階の選択肢を用いた回答の結果、約 95%の学生が本活動を役に立ったと評価した（図 2）。役に立った内容としては、日本語を話すこと（67%）、日本語を聞くこと（44%）、メールを書くこと（22%）、敬語（11%）、日本文化を知ること（11%）、日本人の考えを知ること（11%）、即興で説明すること（11%）、ベルギーのことを考えること（11%）、自信がついたこと（11%）などと述べられていた。バーチャル日本人家庭訪問では、実際の訪問の場合（小熊 2015）と比べて、日本語を「話す・聞く」など主に運用能力の向上に役立ったと回答する率が高かった。他のものが目に映らないオンラインミーティングでは、会話に意識が

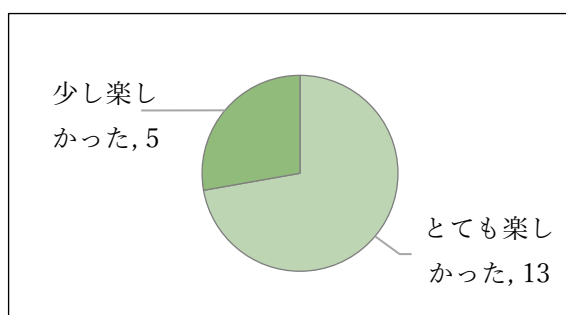


図 1：バーチャル訪問は楽しかったか

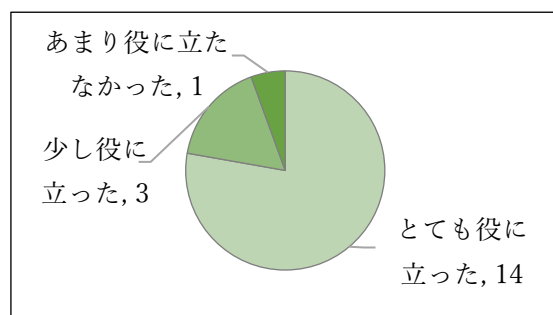


図 2：バーチャル訪問は役に立ったか

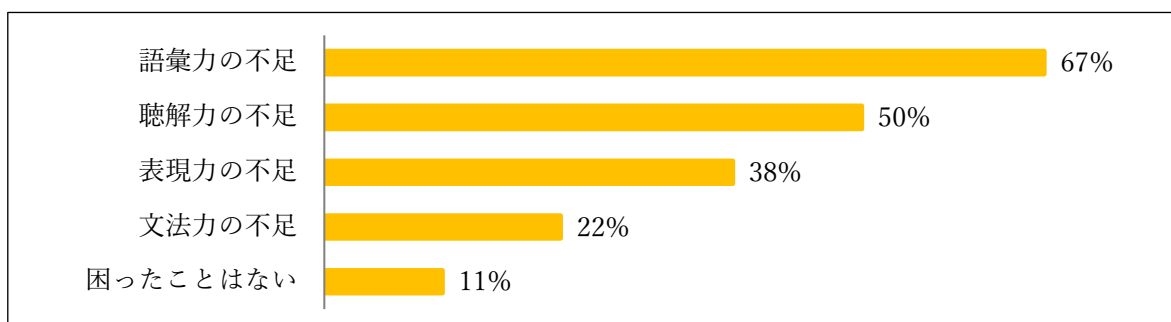


図 3：困ったことがあったか

集中するためではないかと考えられる（小熊 2022）。

質問(3)の訪問の際に困ったことについては、実際の訪問の場合（小熊 2015）に比べて、学生が「困った」と回答した率が高い結果が表れた。バーチャル訪問では、困った内容として言語的な分野のみに意識が向けられる傾向があった（図 3）。オンラインミーティングでは、他のことに気がそれることが少なく、会話を続けなければいけない状況になるためコミュニケーション・ブレイクダウンが起こりやすいのではないかと考えられる（小熊 2022）。

さらに、「バーチャル日本人家庭訪問では、家庭を訪問している感じがしましたか」という質問に対しては、学生の 71%と家庭の 75%が、バーチャル訪問は実際に訪問するのとは異なると回答した。そして、実際に訪問することとの違いについて尋ねた結果、学生からの意見では、「バーチャルミーティングでは、準備されたトピックにもっと固執します」「時間のリミットがあって、目的で話します」「画面で会う人だけ見えました。部屋や周りは隠されてしまった。背景の大切な部分です」などと述べられていた。一方、日本人家庭側にも同様の質問をした結果、「会話のために構えて画面に向かっている感じだった」「余計な背景が映らない場所にパソコンを設置した」「回と時間を重ね、互いにお茶でも飲みながら気楽にやれると家庭訪問的な感覚になる」などの意見が述べられていた。

4 バーチャル日本人家庭訪問プロジェクト 2 年目

4.1 1 年目からの変更点

1 年目の試行に関するアンケート調査で、本活動に対する学生からの評価が非常に高く、また日本への留学中止が続くなか、翌年も本活動を実施することになった。2 年目の活動では、オンラインの訪問をできるだけ実際の訪問に近づけるために、アンケート結果を分析して改善できる個所を探った。バーチャル日本人家庭訪問プロジェクト 2 年目の主な変更点は、以下の通りである。

①家庭的な雰囲気が増すように、2 年目はベルギーに子ども一緒に住む日本人家庭に

依頼した。1年目と2年目の活動の比較を行うため、2年目は1年目と異なる家庭を選んだ。

②活動への協力を依頼する際に、1年目は口頭で伝えた内容を2年目は文書を作成して日本人家庭に配布した。特に、1年目の説明でうまく伝わらなかった、ディスカッションに「2人以上で参加」してほしいことと「家庭の雰囲気を学生に感じられるように」してほしいことの2点を明記した。

③意図した変更ではないが、2年目の活動の頃にはベルギーでロックダウン（都市封鎖）が解除され、外出の制限がなくなるなど社会状況が変化した。

4.2 学生の選んだディスカッション話題

プロジェクト1年目の学生が選んだ話題は、カルチャーショック、ベルギーの日本料理、日本人の日常の宗教、高校でのストレス、日本の行事、公共交通、贈り物、移民であった。2年目の話題は、日本の祭り・祝日、日本の職場環境、日本の広告、食べもの、美の基準、制服、と1年目とは全く異なっていた。2年目の学生には1年目の話題を紹介しなかったが、話題が重なることはなく、学生の興味が多岐にわたることが示された。学生からは、自分が興味のある話題を自由に選べたことが良かったというコメントがあった。

5 2年目のアンケート調査の結果と考察

5.1 日本人家庭による工夫

日本人家庭へのアンケートにおいて、家庭訪問の雰囲気を出すために何か工夫したかという質問に対して、以下のような回答が見られた。1年目の活動では、手作り料理や五月人形の飾りを見せた（1家庭）、子どもと一緒に家族全員で参加した（4家庭）、夫婦で参加した（1家庭）、特になし（2家庭）という結果であった。2年目の活動では、お重や七夕飾り、折り紙などを見せた（1家庭）、子どもと一緒に家族全員で参加した（3家庭）、夫婦で参加した（1家庭）、特になし（1家庭）という回

答であった。

2年目の活動の際には、「家庭の雰囲気を感じられるように」してほしいと書面で依頼したが、日本人家庭の行った工夫の内容は、1年目と2年目で特に違いが見られなかった。また、2年目は子どもと一緒に在住する家庭を選んで依頼したが、子どもの参加状況に関しても、1年目は9家庭中5家庭、2年目は6家庭中4家庭と、ほとんど違いは見られなかった。

5.2 バーチャル家庭訪問中に発生した雑談

実際に家庭を訪問した場合、用意した話題に沿ってディスカッションをするだけでなく、様々な会話が自然と起こる。家庭は複合的な空間であり、部屋に置かれた小物のような目に見えるものはもちろんのこと、目に見えないものについても話題になり得る。それに対してオンラインのミーティングでは、用件に集中した会話になる傾向がある。そのため本研究では、バーチャル日本人家庭訪問が実際の家庭訪問に近づいたかどうかの1つの目安として、雑談が発生したかどうかに着目した。

1年目のアンケート調査によると、以下のような内容の雑談があったと記されていた。日本人家庭が、学生が日本語を学習している理由やベルギーの美味しい店などを尋ねたり、学生が日本に行く時のアドバイスを与えたりしていた。また、学生にオランダ語を教えてほしいと頼んだり、日本人の子どもが手品を披露したりする場面もあった。

2年目のアンケート調査では、雑談に関する記述が増加していた。日本人家庭は、学生が日本のどんなことに興味があるか、どんな漫画が好きか、学生の出身地やベルギーの行事などを尋ねたり、学生に日本のおすすめのお店をおしえたりしていた。また、学生の将来の日本留学や日本での旅行について話した他に、日本人家庭がなぜベルギーに来たのかについても話したと記されていた。2年目には、日本人家庭に「家庭の雰囲気を感じられるように」してほしいと書面で伝えておいたため、会話において家庭的な雰囲気作りが1年目より意識されたのではないかと考えられ

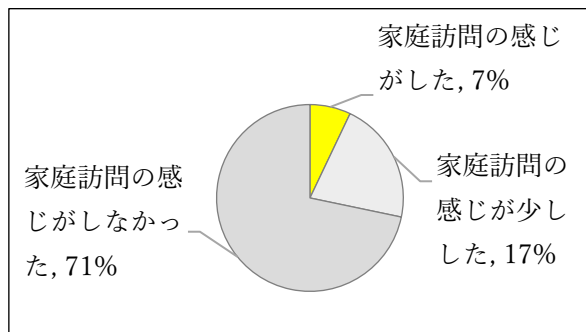


図 4：実際の家庭訪問のような感じ（1年目）

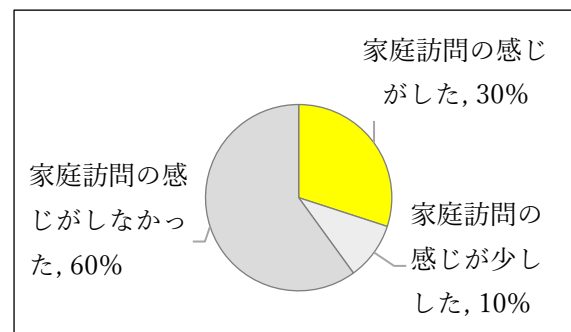


図 5：実際の家庭訪問のような感じ（2年目）

る。その結果，訪問中に雑談が増えた可能性がある。

学生へのアンケート調査のうち，実際に家庭を訪問している感じがしたかという質問に対して，肯定的な回答は 1 年目に 24%だったのに対し，2 年目には 40%に増加した（図 4，図 5）。2 年目の活動では雑談が多かったことで，訪問中に親密でアットホームな雰囲気がより醸し出されたのではないかと考えられる。2 年目は日本人家庭の意識化によって複合的かつ重層的な意味空間である家庭の雰囲気を，学生が少しでも感じられる訪問となったと言えるのではないだろうか。

5.3 バーチャル日本人家庭訪問プロジェクトを通して学んだこと

最後に，学生と日本人家庭が本活動を通して学んだことや気づいたことについて述べる。1 年目のアンケート調査と 2 年目のアンケート調査では，同様の回答傾向が見られたため，両者をまとめて以下に記す。

5.3.1 学生が得たもの

まず，学生に対するアンケート調査の結果は，大きく 2 つのカテゴリー(a)と(b)に分けられる。(a)は新しい日本語や日本の情報を得た・日本人について理解を深めた等の内容，(b)は学生自身の日本語力のメタ認知・自身の学習方略の把握に関する内容にまとめられる。学生の記述のうち，いくつかを以下に紹介する。

(a) 新しい日本語や日本の情報を得た・日本人について理解を深めた

- ・インターネットでは知ることのできない日本人の個人的なイメージを学んだ。
- ・ベルギーに住んでいても、日本的な生活を送れることを知った。
- ・基本的に日本人は優しくて、親切な民族だということ。
- ・新しい日本語を習った。話題について様々な情報をもらった。
- ・日本の習慣や生活についても多く習った。

(b) 自身の日本語力のメタ認知・自身の学習方略の把握

- ・もっと会話に自信がついた。会話も上手になったと思う。
- ・日本語の会話で細部に気を配ることができた。より微妙な議論と話し合いが可能になった。
- ・多分僕は思うようにインタビューが怖くないと思う。
- ・完璧な日本語を話すことについてあまり心配せず、ただ話すことを学んだ。
- ・私の会話能力はまだまだだということ。
- ・自分の日本語にちょっとだけ自信があって、実際にうまくいったので、自分の日本語を確信できた。

5.3.2 日本人家庭が得たもの

日本人家庭へのアンケート調査の結果についても、大きく 2 つのカテゴリ(c)と(d)に分けられる。(c)は滞在国を知る機会に関する内容、(d)は日本をふり返って考える機会や外国に住む自己のメタ認知などの内容にまとめられる。日本人家庭の記述のうち、いくつかを以下に紹介する。

(c) 滞在国を知る機会

- ・日本に興味を持ってくれて嬉しい。日本の事に興味を抱いてくれている喜び
- ・現地の方と話す機会が少ないので、とても嬉しかったです。日本語で話せるので、子どもも参加できる点も良かったです。
- ・ベルギーに対して親近感を持つ貴重な機会になりました。

- ・日本の何に興味をもってくれているのかを知ることができ、とてもいい勉強になりました。
- ・ベルギーの方と直接お話できる機会があまりないので、今回はとても貴重な機会となりました。

(d) 日本をふり返って考える機会・外国に住む自己のメタ認知

- ・日本の言葉、文化の美しさを共感したり家族で見つめ直す機会になりました。
- ・もっと母国語を大切に真剣に使いたいという気持ちになりました。
- ・（一緒に活動に参加した）息子と改めてベルギーでの生活の事や学校の事、さらに「グローバルについて」「多重国籍について」話をしました。私たちにとっても大変貴重で有意義な時間をいただきました。
- ・ベルギーの文化についても伺え、また日本の文化についても改めて考える機会ともなり大変有意義な時間でした。

6 まとめ

本稿では、ベルギーの大学の日本学専攻の現代日本語コースにおいて 2 年続けて実施された、オンラインによる体験型言語学習「バーチャル日本人家庭訪問プロジェクト」について紹介した。バーチャル家庭訪問では、実際の訪問の場合と異なり、言語面の学習に意識が集中する傾向があるが、日本語運用能力の学習に効果的であることが示された。2 年目の活動では、日本人家庭に書面で「家庭の雰囲気や学生に感じられるように」と希望を伝えたところ、日本人家庭の意識化によって訪問中に雑談が多く発生し、親密な雰囲気が醸成されたと考えられる。その結果、学生にとって実際に家庭を訪問している感じが増したことがわかった。

学生にとって本活動は日本語の運用練習、日本の情報を得ること、日本人を理解することの他、自身の日本語能力のメタ認知、自分の学習方略の把握等にもつながった。一方、日本人家庭にとっては、在住国の文化を知り、またふり返って日本や日本文化を見つめ直す機会になったと述べられていた。さらに、一部の日本人家庭

にとっては外国に住む自己の認識にもつながったようである。

本活動はオンラインでの体験型活動ではあるが、学生にとって様々な面で学びが生じたことが明らかになった。また、日本人家庭側にも楽しいだけでなく得るものが多い活動であることが示された。コロナ禍がきっかけで考案されたバーチャル日本人家庭訪問プロジェクトだが、実際の家庭訪問の代替活動としてではなく、体験型の言語学習活動の1つオプションとして今後も有効な学習方法になるのではないかと考えられる。

<引用文献>

植田栄子（1995）「海外日本人家庭で行うホームステイプログラムの有効性：タイにおける日本語学習者の場合」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』 2, pp.213-232, 国際交流基金.

小熊利江（2015）「モスクワでの日本人家庭訪問プロジェクトー海外の日本語教育における体験型学習の一事例ー」『BATJ Journal』 16, pp.19-26, 英国日本語教育学会.

小熊利江（2022）「バーチャル日本人家庭訪問プロジェクトの試みーベルギーにおけるオンラインの体験型学習活動ー」『BATJ ジャーナル』 23, pp.13-21, 英国日本語教育学会.

鹿浦佳子（2009）「ホームビジット・プログラム報告：留学生支援プログラムを考える」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 19, pp.53-61, 関西外国語大学.

トムソン木下千尋（1997）「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』 7, pp.17-29, 国際交流基金.

トムソン木下千尋・舩見蘇弘美（1999）「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者：その問題点と教師の役割」『世界の日本語教育』 9, pp.15-28, 国際交流基金.

The Second-Year Practice of Virtual Japanese Home Visit at a University in Belgium:

What the Learners and Japanese Families Gained from Online Contacts

Rie OGUMA (Ghent University / Ochanomizu University)

Abstract

In order to improve the students' Japanese language proficiency, a project called 'Virtual Japanese Home Visit' was introduced in the Japanese language course of the university in Belgium. The project involved local Japanese expatriate families, who the students visited online in order to converse and discuss with. This year is the second year of Virtual Japanese Home Visit, which has had a few developments from the previous year. One of the major changes that were made in the second year was to give an explanation sheet of this activity to the Japanese families, which clearly requested them to try to create the atmosphere of an actual home visit. This study examines what the students and Japanese families have learned or gained through the activity by conducting a survey to the both groups.

The survey revealed that chatting, apart from the discussion, during the virtual visit increased in the second year and as a result, more students had a feeling of real visiting. The reason was considered that the Japanese families were conscious about making the students' visit more at home and tried to talk more to the students. The result of survey also indicated that through this interactive activity, the students were able to learn new vocabulary and expressions of Japanese language and gained new information of Japan as well as a better understanding about Japanese people. Some students gained metacognition of their own Japanese proficiency and their language learning strategy. On the other hand, the Japanese families commented that it was a precious opportunity to talk with local people and they gained information about Belgium. Japanese families also mentioned that they reflected on their home country during and after the activity, which seemed to lead to the metacognition of themselves as a Japanese person living in a foreign country.